



## 書評

### 「南極メルトダウン」

著者：北沢 栄 出版社：産学社

遂に出た！との思いだ。何のことかという  
と、昨年の暮れに産学社から刊行された『南  
極メルトダウン』という小説だ。作者は北沢  
栄。著者紹介によると、共同通信経済部記者、  
NY特派員などを経てフリージャーナリストと  
なり、官僚社会の問題や特定秘密保護法の問  
題なども、かなり幅広く取り扱っている方と  
いう。日本ペンクラブ会員で、現代公益学会  
の理事も務めておられるようだ。

地球温暖化により南極に膨大に存在する棚  
氷が崩落して大津波を引き起こし、それが日  
本を含む世界各地を襲うというのが本書の主  
たるストーリーだ。作者北沢氏は、豊富な国  
際経験も踏まえ、IPCCの第5次レポートをし  
っかり読み込んで、この小説にリアリティー  
を与えている。小説の主人公は白井清。気象  
庁の予報官を自主退職し、環境ジャーナリス  
トとなって地球温暖化現象を調査研究してい  
る人物として想定されている。

私は兼ねてから、小説仕立てにして気候変  
動問題がかかえる様々な側面を表現するのは  
適切だと考えてきた。なぜなら、気候変動問  
題は単に気象学などの科学的な解明・解説だ  
けで済む話ではなく、その原因を成している  
巨大な産業の反応も深く関係しているからだ。  
石炭・石油・ガス業界、その化石燃料を多量  
に使う電力、鉄鋼、化学など、現在の社会を  
支え、動かしている巨大な企業群もまた、陰  
の主役なのだ。パリ協定の発効により「脱化  
石」が必要ということになれば、当然ながら  
これらの業界は鋭く反応する。持てる政治力  
をフルに使って政治家に働きかけて対策を選

らせたり、資金力を使って科学者やジャー  
ナリストに自分たちの主張を反映させるよう  
にする。このような動きを正確に記述しよう  
と思うと、当然ながらエビデンスが必要とな  
るが、それをきっちりやったのが、ナオミ・  
クラインの『これがすべてを変えるー資本主  
義vs気候変動』という本だ。しかし、ごく普  
通の記者や研究者は、科学的解明や対策手段  
に対する妨害活動のすべてのエビデンスを揃  
えるのは非常に困難である。その代わり、小  
説という形で、気候変動問題がもたらす政治  
・経済上の動きや人間社会に与える巨大な影  
響を書くことができるからだ。

本書を読むと、気候変動がもたらし得る危  
険性（南極の棚氷や北極海の氷、あるいはグ  
リーンランドの問題）について、これまで解  
明された科学的な事実はIPCCの報告を正確に  
紹介しつつ、作者のイメージーションを交え  
た迫真の物語となっている。小説として見た  
場合、いくつか物足りないところはある。例  
えば、グリーンランドの開発利権をめぐる国  
際石油資本の暗躍をかなりリアルに記述して  
いるが、物語の最後が、南極の巨大な棚氷の  
崩落によって発生する大津波への対応で終わ  
ってしまって、グリーンランドの話が消えて  
しまっているのがやや不満だ。

しかしながら、日本では気候変動への危機  
感が、少なくとも表面的にはほとんど見られ  
ない中で、本書が投じた波紋が広がり、環境  
関係者以外の方々の関心や問題意識を喚起す  
るのに役立つことを期待するばかりだ。

(加藤 三郎)